

# 聖書翻訳史の光と陰 上

Light and Shade in the History of Translation of Scripture

楠 本 史 郎

## はじめに

1. 神の言葉としての聖書
  1. (1) 旧約における神の言葉
  1. (2) 新約における神の言葉
  1. (3) 翻訳聖書における神の言葉
    1. (3) 1) いわゆる逐語靈感説の問題
    1. (3) 2) 聖書の翻訳史の流れ
  1. (4) 小結
2. 「召し」の場合
  2. (1) M. ヴェーバーの問題提起
  2. (2) ヴェーバーの所論に対する積義的検討
    2. (2) 1) 旧約における  $\rho\eta$
    2. (2) 2) 新約における  $\kappa\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$  および  $\kappa\lambda\eta\sigma\iota\varsigma$
  2. (3) ヴェーバー所論の妥当性
  2. (4) 小結

## 要 約

聖書は神の言葉と信じられるがゆえに、大きな影響力を持つ。しかし原典においては、旧約はおもにヘブライ語で書かれ、新約はギリシア語で記されており、それを理解できる人々は限られる。そこで聖書は各国語に翻訳され、広く読まれるようになった。その訳出の作業自体が聖書解釈を含み、訳によっては原語とは別の意味が伝えられ、あるいは内容そのものが変えられてしまう場合がある。しかもひとたびなされた翻訳が、広く社会全体に大きな影響を与えることにもなる。本論文では、その例として、第一に「召し」という語を取り上げ、それが翻訳によってどのように職業倫理と結びつき、社会全体を変える梃子となったかを、マックス・ヴェーバーによる聖書積義的分析とそれにもとづく所論を手がかりとして取り上げ、その聖書積義的な妥当性を検討する。このことにより、聖書が翻訳によって歴史にどのように関わったかを検証する。

## はじめに

聖書は、教会とキリスト者にとって、神の言葉である。「聖書はすべて神の霊の導きの下に書

かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です<sup>1)</sup>と記されている。神の霊、すなわち聖霊の導きによって記されたと信じられている。それゆえその言葉には靈的權威が認められ、重んじられる。聖書は「教会の拠るべき唯一の正典」であり、キリスト者にとって「信仰と生活との誤りなき規範<sup>2)</sup>」である。

しかし聖書の言葉がもつ意味は、不変ではない。むしろ聖書本文が新しく理解されることによって、神の言葉の地平は絶えず広げられ、深められてきた。その典型を、16世紀から17世紀にかけて欧州で進行した宗教改革に見ることができる。M.ルターをはじめ、多くの改革者たちは、ローマの信徒への手紙やガラテヤの信徒への手紙<sup>3)</sup>などを手がかりに、「信仰による義」へと到達する。この、神の言葉の再発見に基づき、教会の改革が推し進められていく。この運動は、たんに古いローマ・カトリック教会の刷新にとどまらず、近代への序章として近代市民社会とその文化の形成へと発展していったことが広く認められている<sup>4)</sup>。神の言葉の再発見が教会の改革を引き起こし、それが壮大な規模で、社会、政治、経済、法制、音楽や絵画などの文化等、各分野に影響を及ぼすことになった。聖書本文の、それまで知られていなかった新しい側面が明らかにされる時、人の魂は突き動かされ、時代は大きく変えられていくことになる。

このような聖書本文の新しい理解は、字句に、かつて見られなかった解釈の光を当てることによって行われるが、その重要な契機の一つが聖書の翻訳である。とくに宗教改革は、神の言葉の再発見であるがゆえに、聖書が広く国民に読まれるべきものであるとした。そのために、それまでの教会公認のラテン語訳聖書(ウルガタ)ではなく、各国語に翻訳され、自国語で読むことのできる聖書が求められた。M.ルターは聖書をドイツ語に翻訳し、『ルター訳聖書』を1534年に出版する。聖書翻訳の動きは、おもに福音主義(プロテスタント)各国に、国家的事業として広がり、それによって各国語の基礎が確立されていく<sup>5)</sup>。しかし聖書翻訳はただ宗教改革期にのみではなく、すでに旧約の民の時代に始められていた<sup>6)</sup>。新約の教会においても、同様である<sup>7)</sup>。神の言葉それ自体が、民に読まれ、理解され、信仰を受け継ぐことを求める。

聖書本文が異なる言語に移される時、そこに新しい意味が付け加えられ、あるいは強調される。聖書が神の言葉として權威を持つために、このことが、キリスト者と教会に、そして社会全体に大きな波紋を引き起こす。その結果、歴史が進められることがある。また反対に歴史を歪め、引き戻すこともありうる。聖書翻訳の歴史には、光と陰の部分が交錯している。

## 1. 神の言葉としての聖書

ここでは、旧新約聖書がどのように保持され、翻訳作業をとおして伝えられていったか、概略を見る。

### 1. (1) 旧約における神の言葉

旧約は、その大部分がヘブライ語で、残りはアラム語で記されている。

旧約の民にとって、聖書は何よりも信仰と生活の中核であった。

「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい<sup>8)</sup>」と記されている。

初めの「聞け」のヘブライ語原語 שמע をもってシェマー Shema と呼ばれるこのユダヤ人の

信仰告白は、朗誦され、伝えられて信仰生活の基本となった。

「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをするしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。」<sup>9)</sup>

神はかつてイスラエルをエジプトの奴隷の地から解放し、律法を与え、荒野を導いて約束の土地へ入らせた。旧約の民はこの神の恵みに信仰告白によって応える。神の言葉を全生活において繰り返しおぼえ、次の世代に伝える。それゆえユダヤ人の家庭教育はシェマーの朗誦を基本とし、神の恵みを語り継ぐものとなった。

この事情はとくに王国崩壊後に強められる。BC586年、ユダ王国は北方の大国バビロニアの攻撃を受け、滅ぼされる。首都であり神の都とされたエルサレムは陥落し、神殿は破壊される。多くの民が敵地バビロンへ連れ去られ、捕囚となる。後のBC539年にペルシア王キュロス2世がバビロンを占領、翌年に捕囚民を解放し、帰還を認める。捕囚となっていたユダヤの民の一部はエルサレムに帰還を始め、BC516年には第2神殿の落成と奉獻が成る<sup>10)</sup>。またBC445年にはネヘミヤがエルサレム知事として赴任、以後、エルサレム城壁の修理、回復に取り組む<sup>11)</sup>。しかし多くは異邦の地に散在するディアスポラの民となる。以後、第2次世界大戦集結後まで、ユダヤ人が国を持つことはなかった。離散の民は、ギリシア、ローマの異邦人支配のもとに置かれる。とくにAD66～70年におけるユダヤ戦争によって再度、また決定的にエルサレムは陥落する。これにより、ユダヤ人は90年のヤムニア会議において、聖書、すなわち旧約39書を正典と定め、神の言葉に生きる民として、各地に離散しつつ、民の同一性を確保し続けていくことになる。その中核が聖書であり、その言葉の重要性はさらに大きなものとなっていった。

## 1. (2) 新約における神の言葉

新約はコイナーと呼ばれるギリシア語で記されている。

旧約における神の民イスラエルは、イエスの十字架と復活を経て、その体としての新しい神の民、教会となる<sup>12)</sup>。教会は旧約正典39書を継承し、さらに4世紀末には教会会議<sup>13)</sup>によって新約27書が正典とされ、旧新約合わせて聖書正典66書が確定するにいたる。

新約の福音書においては、イエスは旧約の正典性を承認している<sup>14)</sup>。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである」<sup>15)</sup>と語られる。一見、安息日律法を破るかのように見える言動も、旧約の故事を挙げることによって、批判に反論し<sup>16)</sup>、ファリサイ派による旧来の形式的律法理解を破った、新しい理解を提示する<sup>17)</sup>。さらに「聖書はわたしについて証しをするものだ」<sup>18)</sup>と述べ、旧約全体をキリスト証言と位置づけている。この意味でイエスには、自己を旧約の神の言葉を越える存在とする意識はない。

パウロは「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」<sup>19)</sup>と記し、信仰による義の教えを展開する。しかしこれは旧約律法の単純な否定ではない。ガラテヤの信徒への手紙3:15以下では、アブラハムに与えられた神の恵みの約束が律法に先行すると

指摘する。神の恵みが先行する。律法はその恵みに対する人間の応答である。律法遵守が救いをもたらすのではない。すでに恵みはキリストにおいて与えられており、人間はその救いにあずかり、神への感謝の応答として律法を受け入れる。それゆえ、「キリストは律法の目標 *τέλος* であります、信じる者すべてに義をもたらすために」<sup>20)</sup>と記し、さらに「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです」<sup>21)</sup>とさえ語る。パウロにおいても、律法を含む旧約は神の言葉として認められ、重んじられている。

新約全体は旧約を神の言葉として認め、前提としている。聖書は旧約と新約の全66書によって成る。旧約はキリストを待ち望み、新約はキリストを想起する。聖書全体がキリスト証言である。これが、新しい神の民である教会が受け入れた神の言葉である。

### 1. (3) 翻訳聖書における神の言葉

聖書は神の言葉であり、キリスト者と教会の信仰と生活の基準である。したがって一方では、聖書が基準となるためには、それぞれの言語に翻訳され、読まれ、理解されなければならない。しかし他方では、翻訳された聖書の言葉は、原語そのものではない。翻訳聖書はどのような意味で、神の言葉であるのだろうか。

#### 1. (3) 1) いわゆる逐語靈感説の問題

「聖書の一言一句までが全て神の靈感によって書かれた」とする言説がなされることがある。いわゆる「逐語靈感説」*Doctrine of verbal inspiration* である。また、「聖書は神の言葉であるから、どの部分も全く誤りがない」とする言説もなされる。いわゆる「聖書無謬説」である。これらは、全ての権威を認めない近代人が陥ったニヒリズムから脱却するために、聖書を神の言葉として重んじ、尊重しようとする立場から出たものと言えよう。その程度と実態はさまざまであり、多様性を含んでいる。

しかし厳密にここに立つならば、真の神の言葉は原語のみに限定されることになる。聖書の翻訳の可能性は否定されざるをえない。どの言語も、それをを用いる人々の歴史的、地理的条件と深く関わりながら形成され、発展してきた。聖書本文を、条件の異なる他の言語に完全に移すことはできない。それは、ある意味で原語からの逸脱を意味し、翻訳は不可能となってしまう。したがって、この立場を取ることはできない。

また聖書本文にしても、原本が保存されているわけではない。多くの写本群が残されているに留まる。それらを本文批評学の手法で分類、比較、検討、考量して、本文を再構成していく。その結果、旧約、新約それぞれの底本が作られていく。この作業は今も営々と続けられている。したがって数十年を経るごとに、最新の批評学の成果を取り入れた底本が出され、それに基づいた翻訳聖書が出版されている。その意味では聖書本文自体が絶えず変化する。聖書の文字や字句自体が絶対不変とは言えない。つまり逐語靈感説の前提は崩れている。

改革者たちもまた、聖書の字句そのものを直ちに神の言葉ないし啓示と受け取ることはしなかった。M. ルターは、聖書の内容に批判を加えることがあった<sup>22)</sup>。カルヴァンは、その膨大な聖書研究および説教において示されるように、当時の歴史的、あるいは言語学的な研究を重んじ、その成果を取り入れている。

聖書は聖霊によって記された神の言葉である。しかし同時に、当時の民に対してその言語を用いて与えられた人間の言葉でもある。歴史のなかにあつて時代性と場所性をまとっている。神の言葉が人間の言葉となった。両者の間に解釈の作業が介在する。この解釈作業によって、人間の言葉となった聖書のなかから神の言葉がたち現れる。その解釈作業に翻訳という事柄が含まれる。翻訳聖書もまた神の言葉として重んじられる。

### 1. (3) 2) 聖書の翻訳史の流れ

主要な翻訳聖書を系列ごとに概観しておく<sup>23)</sup>。

#### ①古代訳

- ・『七十人訳旧約聖書』Septuaginta BC 2世紀における旧約のギリシア語訳。母語に疎遠となったディアスポラのユダヤ人が礼拝を守るために作られた。最初期のキリスト教会は、これを神の言葉として受け入れた。新約およびギリシア教父たちによってしばしば引用されている。
- ・『ラテン語訳聖書』ウルガタ。2～4世紀に翻訳され、用いられていた「古ラテン語訳聖書」と総称される断片的翻訳聖書群を、5世紀にヒエロニムスが改訂し、翻訳した。1546年のトリエント公会議で公認され、その後の西欧諸教会に大きな影響を与えた。
- ・『シリア語訳聖書』Peshita 2～5世紀に成立した翻訳聖書群で、東方諸教会にもっとも影響を与えた。その他、アルメニア語(5世紀)、グルジア語訳(5世紀)、ゴート語訳、アラビア語訳、コプト語訳(4世紀)、エチオピア語訳(4世紀)などがある。

#### ②宗教改革期

- ・『ルター訳聖書』1534年 ルターがヴィッテンベルクの協力者たちと共同して原典から翻訳したドイツ語聖書。それ以後、頻繁に改訂を繰り返し、ドイツ語圏諸教会で広く用いられた。
- ・『欽定訳』King James Version もしくは Authorized Version 1611年 16世紀のW.Tyndale訳等を集大成し、英語圏諸教会で長く標準とされた。

#### ③現代訳 おもなものだけを挙げる。

- ・『改訂標準訳聖書』Revised Standard Version 1952年 現代英語圏の代表的翻訳聖書。
- ・『新英語聖書』New English Version 1970年
- ・『現代英語訳聖書』Today's English Version 1976年  
他、各国で多数がある。

#### ④日本語訳 旧新約全体の翻訳のうち、おもなものを挙げる。

- ・『明治訳』(『文語訳』) 新約1880年、旧約1888年。
- ・『口語訳』新約1954年、旧約1955年。
- ・『新共同訳』1987年。

### 1. (4) 小結

聖書の翻訳は、ただ原語を別の言語に移すだけには留まらない。翻訳によって新しい解釈の可能性が生まれる。また同時に、本来、聖書本文が持っていた意味が歪められ、誤解される可能性も生まれることになる。聖書がキリスト者と教会にとって神の言葉である以上、その翻訳は他書の場合とは比較にならないほどの大きな社会的影響を与えうる。

## 2. 「召し」の場合

以下では、聖書の翻訳によって歴史上、大きな影響を与えることになった2つの場合を取り上げ、考察する。初めに「召し」のケースを扱う。

### 2. (1) M. ヴェーバーの問題提起

ヴェーバーはその大著『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』<sup>24)</sup>冒頭において、次のように指摘する。

「近代的企業における資本家や企業経営者についてみても、或いはまた上層の熟練労働者層、とくに技術的・或いは商人的訓練のもとに育てられた首脳者たちについてみても、彼等が別していちじるしくプロテスタント的色彩を帯びている」<sup>25)</sup> (傍点原著者)

彼はこの点に注目し、欧州においては、プロテスタンティズムの持つ倫理性 Ethos と近代資本主義形成の間に、何らかの相関関係があると想定する。本来、ピューリタンと呼ばれるプロテスタント諸派はきわめて反営利的な傾向をもつ。にもかかわらず、その真摯な信仰の実践が生産力の著しい拡大をもたらすのはなぜか。その鍵を、ヴェーバーは新しい職業観念に見る。

中世カトリシズムの職業観念の特徴は、利潤の追求を卑賤としたことにある (アキナス、トマス)<sup>26)</sup>。勤労は尊いが、それによる利得追及は貪欲の罪として斥けられた。こうした価値観は、近代資本主義においてはすでに決定的に転換されている。その例として、ベンジャミン・フランクリンを挙げている<sup>27)</sup>。「外面的には利潤の獲得を指向するにすぎぬ活動が、個人に義務として意識されて『使命としての職業』という範疇にまで構成されるに至ったという事実は、いかなる観念の世界にその源泉をもつのであろうか」<sup>28)</sup> (傍点著者) と問う。

ヴェーバーが注目するのはルターの職業観念である。それは、聖書翻訳によって顕著に表されている。ルターは旧新約聖書をドイツ語に翻訳し、『ルター訳聖書』を出版、それがドイツ民衆に大きな影響を与えた。重要なのは、そこでは、「召し」という原語が、ドイツ語で世俗の職業を意味する Beruf と訳されていることである。

検討されている箇所の一つは、旧約外典のベン・シラの知恵 11:20-21 である<sup>29)</sup>。

「契約をしっかりと守り、それに心を向け、自分の務めを果たしながら年老いていけ。罪人が仕事に成功するのを見て、驚きねたむな。主を信じて、お前の労働を続けよ。貧しい人を、たちどころに金持にすることは、主にとっていともたやすいことなのだ。」(下線は筆者)

ルターは、下線部のヘブライ語原語  $\text{קָן}$ <sup>30)</sup> を Beruf と訳した。 $\text{קָן}$  は元来、 $\text{מְלָאכָה}$ <sup>31)</sup> と同様に、祭司等の宗教的務めを意味したが、後にその宗教性は失われ、「仕事」、「職業」、「働き」を意味する世俗的なものとなっていた。それゆえルターはこれを、ドイツ語で世俗の職業を意味する Beruf というドイツ語に移したのである。

しかし新約のコリントの信徒への手紙一 7:17 ~ 24 については事情が異なる<sup>32)</sup>。ここにはコイネー・ギリシア語で  $\text{καλέω}$  が8回出る。この語は「呼ぶ」、「召す」の意味で、神が、人間を召し出し、自身の神的な務めに就けることを意味する。ルターはこの語をも、世俗の職業を意味する Beruf の動詞形の berufen と訳している。これにより、ルター訳のドイツ語翻訳聖書にお

いては、世俗的職業が、神によって与えられた聖なる務めと同一視され、職業に励むことが神の意志に適うという宗教的動機づけとなる。その結果、プロテスタント諸派は勤労を、神から授けられた尊い使命と理解するに至る。これは聖書本文の意図というよりも、翻訳によって生まれた効果というべきである。「この語の現在の意味は聖書の翻訳に由来しているものであり、それも原文の精神ではなく翻訳者の精神に由来している」(傍点原著者)と指摘されている<sup>33)</sup>。

もともとルターは、「信仰による義」をその神学の中心に据え、宗教改革以前のカトリック教会における聖と俗の区別を打ち破った。その典型がこの新しい職業観念である。すなわち世俗的職業を神の召命によるものとみなし、これを誠実に果たすことをキリスト者の信仰的義務とした。そのことが、聖書の翻訳という作業をとおして行われた。ここにかつての、世俗の職業による利潤の追求を卑賤とし、貪欲の罪と規定した古い中世的職業観念は覆された。

ただしルターにあっては、「各人はひとたび神より与えられた職業と身分のうちに原則として止まるべきであり、各人の地上における努力はこの与えられた生活上の地位の枠を越えてはならない」<sup>34)</sup> (傍点原著者)とされた。つまり前述のコリントの信徒への手紙一7:17～24にあるように、キリストの再臨信仰のゆえに、人は神の定めた職業に留まるべきであると考えられていた。人間が、神の定めた召しを越えてはならないとする点で、伝統主義を超えることはなかった。

これに対して、カルヴィニズムは「神の栄光を増すために」in majorem gloria Deiを掲げ、神の絶対的主権を説く。そのため、救済予定説を強調する。それによれば、救いはただ、永遠の初めに定められた神の意志によるのであり、救われる者と救われない者の区別は神の予定による。いわゆる二重予定説である。そこにおいては、救いを人間の努力や魔術的なものに見る立場は全て捨て去られる。そのためにキリスト者個人の内面的孤独の感情が生まれる。

「この荘重な非人間性をもつ教説が、その雄渾にして徹底的な思案に身をゆだねた当時の人々の心に与えずにはおかなかつた結果は、何よりもまず、個々人のかつてみない内面的孤独の感情であった」(傍点原著者)<sup>35)</sup>とされる。

この不安を除き、神に選ばれているという確信を得るために、神の栄光のためになされる職業労働に励むことになる。こうして世俗の職業が、救いの不安を取り除き、救いの確かさを得る手段として重んじられ、禁欲的な職業倫理 Ethos を生み出すに至る。したがって、プロテスタンティズムの倫理は、資本主義の精神と適合的な関係にあったと結論づけるのである。

「たゆみない、不断の、組織的な世俗的職業労働を、およそ最高の禁欲的手段として、また再生者とその信仰の正しさについてのもっとも確実かつ明瞭な召命として、宗教的に尊重する立場は、われわれがいままで資本主義の『精神』とよんできたあの人生観の蔓延にとってこの上もなく強力な楯杆とならずにはいなかったのである。」<sup>36)</sup>

ヴェーバーの所論の中核は、宗教改革前後における職業倫理の劇的転換にある。それを引き起こした重要な契機が、宗教改革における聖書の翻訳なのである。

## 2. (2) ヴェーバーの所論に対する釈義的検討

前項では、ヴェーバーの所論を、おもにルター訳聖書の翻訳の問題を中心に見たが、ここでは、その妥当性について釈義的に考察することとする。

## 2. (2) 1) 旧約における פת

*Gesenius' Hebrew-Haldee Lexicon to the Old Testament* (Eerdmans, 1980) によれば、旧約において、この語は130回、次の意味で用いられている。

- ①定められた労働ないし仕事の量を表す。出エジ 5:14、箴言 31:15。
- ②定められた堺界を表す。ヨブ 26:10、箴言 8:29。
- ③定められた時間ないし期間を表す。ヨブ 14:13、38:26。
- ④定められた法を表す。創世 47:26、出エジ 12:24。とくに、神が人間に与えた法、すなわち律法を表す場合(申命 4:5・8・14、6:24、11:32、12:1)、定められた取り分や権利を表す場合(出エジ 29:28)などがある。

これらの用例においては、「定められた分」、「分け前」、「堺界」、「期間」、「律法」の意味で用いられており、とくに神の召命と世俗の職業労働が結びついて用いられる場合は見られない。ヴェーバーが指摘したベン・シラの知恵 11:20-21 においても同様である。ルターがこの語を、世俗的職業労働を意味する *Beruf* と訳したことは、適当であつたと認められる。したがって当該箇所についてのヴェーバーの分析は、旧約神学的見地から、妥当であると判断できる。

## 2. (2) 2) 新約における καλέω および κλήσις

W.F.Arndt・F.W.Gingrich *A Greek-English Lexicon of the New Testament* (the University of Chicago Press 1957) によれば、新約において、καλέω は147回、次の意味で用いられている。

- ①「呼ぶ」 マタ 22:43、使 14:12。
- ②「名づける」 ルカ 1:60、使 1:19。
- ③「(人が) 招く」 マタ 22:3、一コリ 10:27。
- ④「(神が) 招く」 一テサ 4:7、エフェ 4:4。

ヴェーバーが指摘した一コリ 7:17-24 では、καλέω が8回出るが、いずれも、上記④の場合に当てはまる。すなわち神が人を招いたこと、つまり召命を意味する。その名詞形 κλήσις もまた20節で1回用いられ、召命を意味することは同様である。

καλέω は18節、20節、21節、24節では各々1回、22節では2回、不定過去形で記される。すなわち、過去に神がただ一回、決定的に人を招いたことを表す。また17節、18節では各々1回、完了形で記される。すなわち、過去に神が人を決定的に招き、その状態が現在も継続していることを表す。それは、具体的には、過去に洗礼を受けて教会に招かれたこと、そして現在もキリスト者として教会に連なっていることを示す。

ここには、神が洗礼によって人を教会へと招き、信仰共同体に導き入れたことが、「召し」として強調されている。この「召し」は、直ちには世俗の職業労働とは結びつかない。むしろ筆者パウロは、同7:26において「今危機が迫っている状態にある」と述べ、終末の接近を強く意識している。そのために7章では、現在の状態に留まることを求める。8節では未婚者とやもめに独身のままでいることを勧め、10節以下では既婚者に結婚生活を続けるよう指示する。当該箇所の17節～24節においても、洗礼を受けて教会に連なった時の状態を保つよう求める<sup>37)</sup>。20節の「おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい」との言葉が、全体のまとめとなっている。

当該箇所における *καλέω* および *κλήσις* が世俗の職業に就くことを意味していると理解することはできない。ここはむしろ、コリント教会のキリスト者に対して、終末に備えることを第一の課題として示し、そのために世俗の立場、身分、生活を相対化することを求めている。それゆえルターがこれらの語を、世俗的職業労働を意味する *Beruf* と訳したことは、今日の新約神学的立場から見れば、「勇み足」ないし「誤訳」とさえ言えるだろう。この点でも、当該箇所についてのヴェーバーの分析は妥当であると判断できる。

## 2. (3) ヴェーバー所論の妥当性

前項で、ルターによる聖書翻訳の実際に関するヴェーバーの分析を跡付け、確認した。次に問題となるのは、こうしたピューリタンの倫理が、果たしてヴェーバーの言うように、職業観念を転換し、資本主義の精神 *Ethos* を生み出す梃子となったと言えるのか、ということである。ヴェーバーの所論に対しては、さまざまな批判が巻き起こった。ここではその全体に触れることはせず、ピューリタニズムの範型をどこに求めるかについて考察する。

ヴェーバーがピューリタニズムの範型と見なしたのは、イングランドのピューリタン牧師、リチャード・バクスター (1615 - 1691) である。バクスターは「その態度がすぐれて実際的かつ和解的であることと、またさらに幾回となく改版され翻訳された彼の著作がひろくその価値を認められていることにおいて、他のいくたのピューリタニズムの代表的著作家たちに比しても一頭地を抜いている」<sup>38)</sup> とし、また予定説の決定的な点、すなわち内面的孤独の感情を生み出す個人の選びの教理を保ち続けていると評価する。彼が、監督制の国教会をはじめ、長老派、会衆制の独立派などを含むピューリタン全体に、幅広く影響を与えたことを重んじる。その結果、ヴェーバーは、ピューリタニズムと資本主義の精神との適合性の面を強く見ることになる。

これに対し、例えば浜林正夫はピューリタン思想の先鋭性に注目する<sup>39)</sup>。ピューリタニズムについても、非国教会派を中心ととらえ、長老派と独立派右派だけでなく、独立派左派および諸分派、つまり分離派をも含める<sup>40)</sup>。このピューリタニズムの範型として、ジョン・オウエン (1616 - 1683) が挙げられている。オウエンは英国ピューリタン革命の進展とともに独立派に接近し、クロムウェル革命政府の宗教的代弁者となった。予定説による個人の選びを強調し、万人の救済を否定した。選ばれた聖徒の集団としての教会が、この世の悪や敵と戦うべきであると主張する。その結果、彼の思想は古い体制を破壊する革命思想となる。浜林は、こうしたピューリタニズムの革命的・破壊的な側面を強く見る。同時に、オウエンにあっても世俗的職業労働は神の召命と見られていたとしている<sup>41)</sup>。バクスター以上に一貫して個人の選びを徹底したオウエンは、カトリック的な世俗外的禁欲を非難し、むしろ世俗的なものを宗教的なものへと高めることを目指す。その主要な形態が、世俗内的禁欲としての職業労働であった。したがって本来のピューリタニズムは資本主義の精神とは異質であり、むしろ古い体制を破壊し、革命的独裁をもたらす思想的背景となる。資本主義の精神、ないし近代思想は、このピューリタニズムが解体された後に生じたとする。

一方、ヴェーバーが範型としたバクスターの立場は、より实际的、和解的である。むしろ分離派を戒め、国教会から長老制、会衆制を含む非カトリック諸教派を結集した国民教会の形成を試

みた。またそれが可能であると信じた。実際に彼の努力はウスターシャー教会連合として実り、多くのピューリタンに影響を与えた<sup>42)</sup>。バクスターは、その著作『キリスト教指針』において、とくにキリスト者にとっての職業労働の意義を強調している。

「質問五 なぜ、労働は可能な全ての人にとって必要なのですか。

答1 神が全ての人に厳格に命じておられます。神の命令はわれわれにとって十分な理由です。」<sup>43)</sup>

さらに、勤勉に労働するための時間の使い方や健康管理、睡眠時間などの生活の仕方にもいたるまで細かく指示している。こうした著作活動をとおして、バクスターはピューリタンたちに、現実的な生活の指針を与えた。その中心が、世俗内的禁欲としての職業労働であった。ヴェーバーはこのバクスターのなかに、近代社会を形成していく宗教的基盤を見出し、それをピューリタニズムの範型とした。

## 2. (4) 小結

ヴェーバーの所論に対して、論者の立場や見方によってさまざまな批判を加えることは可能である。そもそも、何をもってピューリタニズムと定義するのか、誰をもってその範型とするのかについて、必ずしも見解が一致しているわけではない。このことが論争を複雑にしてきた。しかし次の点については、ヴェーバーの理解がほぼ承認されているのではないかと考える。

- ①ルターが聖書の「召し」を、世俗的職業労働をあらわす Beruf と翻訳し、そのことが、職業を神が与えた使命と見る新しい倫理を生みだし、職業観念を大きく転換させたこと。
- ②この新しい職業観念がカルヴィニズムに受け継がれ、予定説を媒介および原動力として、広くプロテスタント諸派に普及したこと。
- ③そのことが、何らかの形で資本主義の精神と近代市民社会形成へとつながったこと。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」との、ヨハネによる福音書冒頭を思う。聖書が他の言語に移される時、聖書本文が持つ以上の意味内容が新たに付け加えられることがある。そして聖書は神の言葉であるがゆえに、権威をもち、人々に大きな影響を与える。歴史を担い、進める力となる。しかしそれだけではなく、歴史を歪め、引き戻すこともありうるのである。

## 注

- 1) 『新共同訳聖書』(日本聖書協会、1987年。以下の聖書引用はこれによる) テモテニ 3:16
- 2) 「日本基督教団信仰告白」1954年。
- 3) 例えば、ローマの信徒への手紙 3:21 以下、ガラテヤの信徒への手紙 2:16 など。
- 4) 菊地榮三・菊地伸二著『キリスト教史』(教文館、2005年) 264頁以下。
- 5) 例えば、スコットランドとイングランドにおける King James Version 『ジェームス王欽定訳聖書』1611年。
- 6) その代表的なものが、BC 2世紀における旧約のギリシア語訳の Septuaginta 『七十人訳旧約聖書』である。
- 7) 2～5世紀におけるシリア語訳聖書 Peshita、起源を2世紀に遡る古ラテン語訳聖書、そして4世紀のウルガタ訳などがある。

- 8) 申命記 6:4-5
- 9) 同 6:6-9 このような、神の絶対唯一性に対するユダヤ教の信仰告白は、この他に、申命記 11:13-21、民数記 15:37-41 が用いられた。
- 10) エズラ記 6:15-16
- 11) ネヘミヤ記 2:1 以下
- 12) コリント一 12:27。なおエレミヤ 31:33 などの旧約預言を参照。
- 13) 393年におけるヒッポの教会会議、カルタゴ第3教会会議などにおいて新約の内容に関する決議が行われている。
- 14) 例えば、イエスはマタイ 4:1 以下の悪魔の誘惑を旧約の言葉によって斥ける。同 4 節は申命記 8:3 からの引用であり、7 節は同 6:16、10 節は同 6:13 である。
- 15) マタイ 5:17
- 16) マルコ 2:23-28
- 17) 同 3:4
- 18) ヨハネ 5:39
- 19) ガラテヤ 2:16
- 20) ローマ 10:4
- 21) ガラテヤ 6:2
- 22) ルターは信仰義認を聖書の中心主題ととらえ、その立場からとくにローマの信徒への手紙やガラテヤの信徒への手紙を重んじた。一方、信仰の行いを強調するヤコブの手紙を「藁の手紙」と呼びさえしている。
- 23) 『旧約・新約聖書大事典』（教文館、1989年）668頁以下による。
- 24) Weber, Max *die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Tübingen, 1920（梶山力・大塚久雄 訳 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』上下 岩波書店 1955年）
- 25) 同書上 p.15
- 26) 同 p.82
- 27) 同 p.42
- 28) 同 p.84
- 29) 同 p.96 聖書の引用は『新共同訳』による。
- 30) 他にレビ 10:13、出エジ 5:14、箴言 31:15 など。
- 31) 出エジ 35:21、サム上 8:16 など。
- 32) Weber, 前掲書 p.105 以下
- 33) 同 p.95
- 34) 同 p.124
- 35) 同書下 p.25
- 36) 同書下 p.225
- 37) 一コリ 7:21 は奴隷身分のキリスト者への勧めであるが、後半部は、文法的に、正反対の二つの訳が可能である。実際、『口語訳』は「召されたとき奴隷であっても、それを気にしないがよい。しかし、もし自由の身になりうるなら、むしろ自由になりなさい」としているが、『新共同訳』は「召されたときに奴隷であった人も、そのことを気にしてはいけません。自由の身になることができるとしても、むしろそのままいなさい」とし

楠 本 史 郎

ている。しかし前後の文脈は、召された時点での身分・状態に留まることが勧められているのだから、『新共同訳』のように訳すことがふさわしいと考えられる。とすれば、ルターが、神が与えた職業労働を人間が変更せず、そのまま受け入れるべきだとしたことは、彼にとっては当然の帰結であったとすることができる。但し、当該箇所が終末の接近という緊張のなかで書かれ、その事態を前提としていることは明らかである。この特殊な事態における言葉を、世俗の、いわば一般的な職業労働に直接当てはめ、人は神から与えられた職業を変えるべきではないとするルターの理解は、必ずしも、聖書積義的に妥当とは見えない。

38) Weber、前掲書下 p.165

39) 浜林正夫『イギリス革命の思想構造』未来社 1966年

40) 同書 p.67

41) 同書 p.63 以下

42) 梅津順一『ピューリタン牧師バクスター 教会改革と社会形成』(教文館 2005年) p.63 以下

43) 同書 p.265